

1) 第 40 回日本認知症学会 学会奨励賞受賞

Tezuka T, Takahata K, Seki M, Tabuchi H, Momota Y, Bun S, Sato Y, Ueda R, Kubota M, Moriguchi S, Nakajima S, Jinzaki M, Mimura M, Nakahara J, Ito D. [18F]PM-PBB3 and plasma p-tau181 and NfL for Alzheimer's disease.



令和 3 年 11 月 27 日に東京で開催された第 40 回日本認知症学会学術集会で、手塚俊樹君が学会奨励賞（臨床）を受賞しました。

受賞内容は、アルツハイマー病の診断として急速な進展がみられるタウ PET 画像と血液バイオマーカー（リン酸化タウ 181 と Neurofilament lightchain (NFL))との関連を示した研究です。（伊東大介）

2) 加藤玖里純（くりす）君（慶應義塾医学部 2 年）

原著論文が国際誌に掲載



医学部 2 年 加藤玖里純君が筆頭著者である original article が国際誌 Journal of Neurology (1891 年刊行)に掲載された。学部 2 年生での論文は極めてまれである。

題目は、「Influence of a clinical trial in the decision-making processes of patients with amyotrophic lateral sclerosis」である。本研究は、難病である筋萎縮性側索硬化症の (amyotrophic lateral sclerosis : ALS) 臨床治験参加が延命治療の意思決定への影響を検討したものである。近年、ALS の延命治療に関する事件が相次いで報道され、社会的な関心も高い倫理的課題である。同君は、学部 1 年秋より課外活動として研究を開始し、コロナ禍であり指導教官とのディスカッションはほとんどがメールで行われた。本研究は臨床治験参加により延命治療希望が劇的に低下することを見出した。この結果は、今後の ALS 治験のデザインに影響する重要な知見として reviewer からの高い評価を得ての掲載となった。(伊東大介)